

この論文は、日経・経済教室の藤田康範氏（慶応大学教授）の論文を基に加筆作成させていただきました。経済学者の「クローサー」は、国の経済発展段階は経常収支の変化に反映されるという発展段階説を提唱しました。それは、次の6段階です。

段 階	経済のタイプ	内 容
第 1 段階	未成熟な債務国	貧困な国で、成長に乏しく、先進国から経済援助されている段階
第 2 段階	成熟した債務国	先進国から経済援助されてはいるが、経済が発展しつつある段階
第 3 段階	債務返済国	経済成長により、債務を返済しつつ、債務国へと変身しようとしている段階
第 4 段階	未熟な債権国	多額の経常収支黒字が続き、債権が増大している段階
第 5 段階	成熟した債権国	経常収支は黒字だが、貿易・サービス赤字を所得収支の黒字が補う段階
第 6 段階	債権取り崩し国	双子の赤字により、蓄積された債権が減少し、経済が弱体化する段階

この中で、中国は経常収支の黒字により、第3段階の「債務返済国」です。また、巨額の財政赤字と経常収支の赤字の双子の赤字のアメリカは「債権取り崩し国」です。

日本と言えば、「未成熟な債権国」から「成熟した債権国」に移行しつつあります。成熟した債権国とは、経常収支は黒字ですが、その内容は、貿易・サービスの赤字を所得収支の黒字で補う段階であり、「貿易で稼ぐのではなく、海外投資のリターンで稼ぐ」ことを意味しています。

日本において、財政赤字が解消されない中で、経常収支も赤字となれば、アメリカ同様に財政・経常収支の双子の赤字を抱える債権取り崩し国になってしまいます。

この債権取り崩し国にならないためには、財政収支の赤字を解消することも1つですが、経常収支の黒字を保つことが必要となります。日本のような未熟な債権国では多額の経常収支の黒字は、貿易・サービス収支の黒字によるものですが、成熟した債権国になると貿易・サービス収支は赤字となり、その代わりに「所得収支」（海外投資によるリターン）が中心になります。

この所得収支の黒字化と拡大は次の方法が考えられます（現在、日本は貿易・サービス収支の黒字が減少しつつあり、一方、所得収支の黒字が増大し、所得収支の黒字が経常収支を下げ支えするようになりつつあります）。

①日本の現在 250 兆円の対外純資産の活用

日本は世界一の対外純資産保有国（第2位は中国の150兆円）であり、この250兆円の対外純資産を円高を利用して外国で有効に活用すれば、当然ながら所得収支の黒字が拡大することになります。

②脱・一方通行型の資産運用

現在の日本は貿易・サービスで蓄えた資産を外国で運用する一方通行型の資産運用で所得収支を黒字化しています。一方、アメリカやイギリスのように、世界から投資資産を呼び込み、その資金を国や企業や投資家が世界で高い収益が見込まれる事業や資産に投資して、所得収支の黒字を獲得することが日本でも必要です。

③ハブ（拠点）センター型の資産運用

ハブ化に当たってはアジアを念頭に置き、アジアの新興国・発展途上国には旺盛な資金需要があります。一方、日本には巨額の個人金融資産があり、これらの資金の需要と供給関係を、東京証券取引所を通じて結びつけるよう各種の政策を行い、日本を金融のハブセンター化することが必要になります。

④新産業の育成と成長政策

ハブセンター化により、日本国内の金融策の付加価値が高まると同時に、IT、法務、会計などの金融関連サービス産業が活性化することになります。また、従来型発想の産業ではなく、1980年代に双子の赤字を抱えたアメリカが、技術が革新により競争力の回復を目指し、実現したように、日本でも21世紀型の新産業・新消費を創出すべきです。

(株)ダイナミックマーケティング社⁺

代 表 六 車 秀 之